松代藩第六代藩主真田幸弘点取俳諧『きく畠』の紹介と翻刻

玉城司・小幡伍・平林香織

本稿は、「松代藩第六代藩主真田幸弘点取俳諧『きく畠』の紹介と翻刻（1）」（『長野県短期大学紀要』第66号）に続く（2）で、真田宝物館（松代文化施設管理事務所）所蔵『きく畠』（目録番号4‐1‐1‐1）所載九百韻のうち、第六から第九までの四百韻を掲載する。なお、（1）の解題と書誌を再掲する。

【解題】

松代藩十万石第六代藩主真田幸弘は、元文五年〈一七四〇〉生れ、文化一二年〈一八一五〉没。七十六歳。俳号菊貫・白日庵他。以下俳号により菊貫と記す）は、漢籍、和歌、俳諧、紀行、書画に分類される膨大な文芸資料を残している。中でも、『菊の分根』または『菊畠』と名付けられた一七〇点を超える点取俳諧資料は、九百巻九万句に及び、明和九年（安永元年＝一七七二、三十三歳）の『菊の分根』一冊十六巻（一六〇〇韻）から、文化十一年中の『菊はたけ』四冊二一巻（二一〇〇韻）まで現存しており、平均すれば、年に二十回以上の点取俳諧に一座していたことになる。

点者には江戸座の俳諧宗匠存義・一漁らのほか、文化年間には雪中庵完来など雪中庵系俳人も加わり、点者が百韻につき百名にのぼる巻もある。なお、菊貫は、明和・安永期ころ、高太初や大島蓼太にも師事して、蓼太が裏書をした文台が、真田宝物館（松代文化施設管理事務所）に伝来している。[1]

菊貫の治世は、宝暦二年（一七五二、一三歳）から、寛政十年（一七九八、五九歳）までの四十六年間に及ぶ。藩主の座についてすぐに恩田木工民親を勝手方家老に登用、恩田木工は、役人の不正を正し、百姓の声に耳を傾けながら倹約に努め、藩政を刷新したと言われている（宝暦改革）。一方、菊貫は儒学者菊池南陽を松代に招聘し、藩士の教育活動に力を入れた。また、和歌を賀茂真淵に学び、真淵門の大村光枝を京都から松代に招くなど、真田昌幸・信幸・幸村以来「武の真田」として名を馳せた真田家であるが、菊貫の事績は「文の真田」としても面目躍如たるものがある。

菊貫の文芸資料については、早く福井久蔵によって、「一巻に収むるもののみにてもその数すくなからず、その全部に於ては甚大の数に上る」こと、また、「当時名たゝる俳師」「諸侯」が一座していることが紹介されている（『諸大名の学問と文芸』昭和一二年五月、厚生閣）。本格的な紹介としては、俳諧紀行を翻刻した玉城司・伊藤善隆の「翻刻　菊貫著『旅つゞら』」（『研究と評論』56号　平成一一年六月）、「翻刻　青葉陰」（『研究と評論』59号　平成一二年一一月）がある。玉城らは、熊本藩や庄内藩などの大名文芸活動についての調査研究を行っていた井上敏幸・西田耕三氏らと共に、平成一七年から科学研究〈基盤研究B〉「近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究」（課題研究番号17320040　研究代表者井上敏幸）を実施し、菊貫（真田幸弘）四〇歳から七〇歳までの年賀集を雑誌『松代』17号（平成一五年三月）～21号（平成一九年三月）に継続して掲載した。[2]

年賀集は、幸弘の和歌・漢詩文・俳諧を総体的に理解する糸口となる。なお、その成果は『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究　論文編・資料編　第一部』（平成二十年三月）にまとめられている。

以上のような研究成果に基づいて、六代藩主真田幸弘の点取俳諧資料を調査・研究の対象として、『御側御納戸日記』『家老日記』等の公的な日記から読みとれる幸弘の動向を視野に入れ、平林香織らと科学研究費を得て着手した（基盤研究C「真田文書アーカイブの構築及び松代藩第六代藩主真田幸弘の点取俳諧に関する研究」課題研究番号22520252　研究代表者玉城司）。

本稿は、真田宝物館所蔵幸弘関連点取俳諧のうちの目録番号がもっとも若い享和元年（一八〇〇）～三年の『きく畠』（四冊・全二七巻（目録番号4‐1‐1）の第一冊目の後半部に当たる。

（注1）文台の裏書は次の通り。

松代の君昇進させ給ふ折から飛田の国の人より贈たる一位のときにめでたければ発句得て祝し奉けるを頓て御もの数寄の文台に造らせ給ひてうら書きせよとあふせ事のありければ

おもしろきはつ日やこゝを位山　蓼太

（注2）

菊貫の俳諧一枚摺に関するものに、雲英末雄「俳諧一枚摺について」「真田菊貫の俳諧一枚摺」（『書誌学大系84俳書の世界』平成一一年、青裳堂）、雲英末雄監修『俳諧一枚摺の世界』（平成一一年、早稲田大学文学部）、玉城司「真田幸弘の俳諧一枚

摺」（『江戸文学』25号、平成一四年六月）がある。井上敏幸『翻刻　ちかのうら』（『松代』16号、平成一五年三月）は菊貫の追悼句集の紹介・翻刻を行たもの。

【書誌】

真田宝物館整理番号・題名　4‐1‐1‐1・きく畠

書型・装幀・料紙　大本　縦二六・九糎、横一八・六

糎　袋綴　楮紙

表紙・題簽　砥粉色無地　原題簽、左肩無辺打雲「享和元酉同二戌　幾久畠　他連　乾」

本文共紙　全九一丁　墨付九一丁　行数7～8

（『近世中・後期松代藩真田家代々の和歌・俳諧・漢詩文及び諸芸に関する研究　資料編第二部』（平成二十年三月）による）

【凡例】

1　旧漢字・異体字は原則として原本の通りとした。

2　点数は縦並びの点者順に句の横に記載した。

3　連衆に付された長点（最後の付けを示す）は、連衆名の上に「印を付した。

4　本の閉じ目が固く判読不能箇所は□で表した。

【翻刻】

壬戌初夏

御

梨東
計涼
馬隱
楳足

百聲

山の井も
　千尋に見へつ
若葉陰
御　」54ウ

扇に記す旅の道法
柱までむかし普請の太くして
　てつちか髪の油気ハなし
蓋とれハ海老のうくめく肴籠
　生れ在所を言葉にそ知る
雲晴て猶一入の月の照
　虫聞ふなら此あたりなり
環川子　冬英　陸馬」（付箋）
ウ　」55オ

三　一　七　御
乗つれた女衒の駕籠にからす瓜
五　十八　五　梅足
　妻の氣たてに家内賑ふ
七　一　一　馬隱
堀抜と前の長者の置土産
一　五　一　計涼
　不二南から催する雪
一　五　一　梨東
猫の目に狂ひ時計の懸合セ
一　七　十　御
　シテの素貌に姦しき翠簾
十　一　七　梅足」55ウ
うら若く世に住む尼の羽織着て
三　三　十　馬隱
　菊をほめ〳〵老の長尻
一　五　一　計涼
暮安き日を照り返す村紅葉
一　一　一　フ
　月のゐたゝき山のおもかけ
五　十　三　御
くつさめの我におとろく大伽藍
一　五　五　梅足
　不斗母の手に見出す珠数たこ
一　一　一　フ
木の下はむかしめいたる花の幕
一　一　一　フ」56オ
　芝生の中に菫とひ〳〵
二　五　七　七　馬隱
藪入の鋲打目たつ田舎道
一　五　一　梨東
　女力の孫につたわる
七　十五　一　計涼
百日の飽丁いさや初鰹
一　三　三　御
　裏家水汲む江戸の玉川
五　五　十一　梅足
樂隱居皆世にすねた人出入
三　七　一　馬隱
　嘉例にて酔ゑひす講中
一　五　一　梨東」56ウ
鯛の尾に長口上をまねられて
七　七　一　計涼
　透見の帯をいたつらに引
一　五　十　御
這ひ渡る九軒揚屋の夕蚊遣り
五　七　一　梅足
　匕より口のまはる流行醫
三　十三　五　馬隱
新蕎麦の手からもてうと秋乾き
三　五　五　梨東
　留守の庵の萩に短尺
一　一　一　フ
夕月の雲のときれにちらほらと
一　一　一　フ」57オ
　きせる箇にも見ゆる物好
二ウ　一　一　三　計涼
三圍りて連を待間の絵馬堂

五廿　三　五
己かさま〳〵化る白扇
一　五　一　六御

手を打て白髪くらふる古傍輩
三　五　一　六梅足

禿あわれに明の寝姿
一　一　一　六馬隠

何となく袖留た日の物たらず
三　五　一　五梨東

光る銅壷の上に神棚
一　一　十五　六計涼

親舩は暮行としの岡見して
一　一　一　七御」57ウ

思ひ切たる晦日の雪
一　一　一　七梅足

盃の蒔絵の月も冴ぬらん
一　七　一　フ

狐離れて本の重口
一　一　三　六梨東

絹よりは木綿着こなす今参リ
七　五　一　七馬隠

女坂ても春の一行
五　一　一　七計涼

引連れておもひあふたる花めくり
五　一　一　フ

雀巣作る軒の樋竹
三　一　一　フ」58オ

治聾酒にたま〳〵老の酒機嫌
一　五　五　八梅足

禅の修業に越て来る嵯峨
十　一　五　八馬隠

榾の火に氷る夜すから冬しらす
一　五　七　七梨東

一人娘の婿を筭へる
一　一　十五　八御

代参もうき〳〵とする願ほとき
一　五　一　八計涼

土産ひらけハ落る椰木の葉
三　七　一　九梅足

夏まけの昼寐に通ふ濱屋敷
一　五　三　九馬隠」58ウ

窪おりてから七日仮橋
十五　一　一　八梨東

菜の花にぬつと羅漢の破風見へて
一　一　七　十御

桜に近く畳む青傘
五　七　五　九計涼

糸遊に蝶追まはす女の童
五　五　一　十梅足

ゆへ有寮に琴の寿ひ音
一　一　一　十馬隠

丸窓へ角なき月の陰さして
一　一　一　フ

露ちり〳〵に荻の上風
一　一　一　フ」59オ

三ウ
五　七二十点　五廿

稲苅の中を牧士か仕入駒
五　九梨東

一　一　五
親の欲目に染木算へる
一　十御

一　七　一
いつとなく乱るゝ糸の恋衣
一　一　一　十計涼

百里離れた所に歌の師
十五　七　五　十一梅足

情なく舟曳岸の杜若
一　一　一　十一馬隠

関の厠に昼の蚊柱
一　一　一　十梨東

仇討はあの乞食かと驚きて
一　一　一　十一御」59ウ

一　一　一
齢は百と苦界三年
三　五　一　十一計涼

恨いふ顔にも愛のこぼれける
一　一　一　十二梅足

水屋に聞ハ今朝の旅立
一　五　五　十二馬隠

来るや否懇意の多き京の宿
三　一　一　十一梨東

爰にも飛騨の工む御社
三　一　一　十三馬隠

垣結ふて謂ありけなる花一木
一　一　一　フ

みせののれんに狂ふ乙鳥
十八　三　一　フ」60オ

負ふた子の眼に遣ハるゝ雛買ひ
一　一　五　十二御

騎る亡八に附紐の娵
一　五　一　十三梅足

鉄漿のまだ宵ながら貰ハれて
一　五　三　十二計涼

木ちん泊へ居風呂の布施
七　一　一　十二梨東

遁世の身にも世話する拂庵
十　一　五　十四馬隠

才布を探〳〵郭見
一　五　十　十三御

青葉にも
下闇に通天橋の蝉時雨
一　十　七　十四梅足」60ウ

紺帋の夏書風の涼敷
三　一　一　十三計涼

進物の飪にわざとのし添て
一　一　一　十三梨東

七　七　一
根付の磁石かりる移徒　十五「馬隠
五　一　七
そこに見る隣へ遠音越の雲　十四御
一　一　一
産家の伽に雇ふ輕口　十五「梅足
一　一　一
約束の月もほとなく近く也
一　三　一
秋風渡る橅原松原　」61オ
ナウ
三　一　一
蝙蝠の相撲取艸に投られて　十四計涼
五　五　一
化物屋鋪まだ傍に杭　十四梨東
七　一　一
御油へ来て勇氣抜る武者執行　十五「御
一　一　五
招婦か帯のぬぐ橡を掃　十五「計涼
七　十五　一
恪気した鏡にうつる角大師　十三「梨東
一　一　一
とこから流行り来てかとり年
五　一　一
本復の出初も調度花盛　」61ウ
一　一　一
いとゝ百千の
いさむ轉り　」62オ
壬戌年　（貼紙＝後補）　」62ウ

如佛持
崔林子御持　一漁　菊貫持　陸馬
崑山　石鯨

百聲

月花筆
各八句言
道具附　帳添
剋附
湖秋子御持　徳器　催主
立志　菊貫　」63オ

菊貫
夜蕎麦賣聲のときれやほとゝきす　」63ウ
濕る煙草に先つ知れる入梅
透垣に敷寄屋かゝりの路次ふりて
遣ふてみれは僕の気輕さ
貧乏樽いつの世よりか名付けむ
またく計の川に石橋
松一木月のもふける手を入て
馬追ひ虫の耳に付なり　」64オ

崔林子御持
湖秋子御持
如柳　一漁　崑山　花谿　得器　立志
菊貫持
徒柔　陸馬　石鯨
環川持
几友
（付箋）

（ウ）
一五七一一七十十七一
向島藝者をつれて秋めかす　菊貫
一一五一二一十三七七二
酒の過るを妻ハ案事る　環川
七十一七五十五七一五一
南天も笹の音して夜の雪　梅足
一一一七一一七五一十
碁ては敵のしかも相口　馬隠

五三七一二二五七五一
勝公事に紫衣さえ京の立惜み　計涼
一一三一一一十八十十五　七
嬉しけに振足らぬ牛の尾　三遥
五五一二五七一十一一
子かあるて親ミの付かね舎　鶴林」64ウ
（点アルモ、トジ目固く、点判読不能）
禾黍を動す賤か近道　雪江
一一一一一一一一三
月白う残り旭はハほからかに　執筆
七一一七七十一一七五
塒出の鷹やよい男ふり　葵光
一五五五五十三一五十一
丹後殿前より馬を乗放ち　湖秋
一一一一一五一一五
金看板の目立つ新店　二計涼
一一一一一一一一一
やかて咲花を心に枝と笠　フ
一七三五一一七七七一
旅をする氣て彼岸待つ母　二梅足」65オ

二
三一七一十二七一一二
去年揚し縫あけを最ふ揚置し　二環川
一一五十五十五一一五三一
寐転ふ腹の上に細見　二菊貫
一一七五二一十一五十
居風呂も妾の目見の道具にて　二馬隠
一三一一一一五一一一
河骨活る側を掃出す　三計涼
一五三七三一一五一一
づう〳〵し天下祭の牛の面ラ　三菊貫
十一七十八五三五二十七十五
一本餘る取膳の箸　三環川
三七七一七五十七一五
別荘の梅に家内を引つれて　三梅足

一三一一（点判読不能）
霞の奥に隅田の念佛　馬隠」65ウ
七七七五一一一一十二　雪江
切凧を善ふて来ても渡し舩
一一五一一一一一一十三
大振袖の孕む追風　霍林
一一三一一一一五一一
御油泊俄に苧桶片付て
一一一一一一一一一
影さへやはり圓窓の月　三遙
五十二十一二五一一五三三
蔓枯て引たゝむへき種瓢
一一一一一一一五七
早く醒たる秋の生酔　フ
二ウ
一十三七五七一一十五一五　雪江
鸚鵡石百囀りの長局
三一一一五一一七一一
高尾身請に胸や陽炎　霍林
一七一五三一三十一五
花ハ雪堤の左麦青し　湖秋
一一一一一一七一十五
ぽんといふ音は出ぬ古鼓　葵光
七一五一一七七一七一
陣の留主いはけなき子に憂さ晴し　フ
五一一一一一七一一　湖秋
物に構はす禅となる尼
一十一一二一一五五二　葵光
北条の烏帽子ハ海に残りけり　菊貫」66ウ
（判読不能）七一五一五
閑古鳥聞今の鎌倉　梅足
三五五三五七一一一五
紫陽花に昨日の酒をかこち顔　計涼
一一五一一一一一五二十七
掛りあふせて伯父の跡取　馬隠
一一七一一一一一五一一
腰元の素生ゆかしき立まハり　環川
一三一七一一五二十一十三十八
拾た文を目たらけて讀　菊貫
一一一一一一一一一一
来る程の人引とめて月催ひ　フ
一一一一一一五一一
さあ御肴と僧へ焼栗　環川」67オ
三
五十七十十七十七五五
取崩す樓船も川に秋更て　馬隠
一一一一二七一五一一
先四里四方正面の不二　計涼
一一一一一五一一一一
風景を唯隠居所は家相より　梅足
七三十二二一一一七一
紅粉青娥雪の寒梅／＼　鶴林
十十五五五三七一七一一
旅枕あとしら波の恋をして　三遙
一七一一一一一七一三
伊勢の木綿の紡も陰陽　雪江
一一十五一七一一五一五
腹魚のまゝて蛍を追ふて行　鶴林」67ウ
（点判読不能）
草茫／＼と左迂の跡　三遙
一十八七十三五一一三一七二十
剱菱は我らか為の益氣湯　雪江
一一五二五一一一一一
麒尾に従ふ無休貳朱判　湖秋
一一十五五一一五十一一
奥ゆかし清歌好舞の御錠口　葵光
一一一五一一一一一一
有明山に春の夕月　フ
十八七五二十七十八三三五十八七　湖秋
小田返す馬踏濁す桜影
一一一一一一一一一五一一
好んで新身さした強力　葵光」68オ
三ウ
一五一一一一一一一一　計涼
腹痛に噛み残したる観世音　梅足
五二十五五一七一一一一三
干潟の舟の嘴に日の影
五一七一五十八一三一一　菊貫
四郎兵衛か関路一里も千里にて　馬隠
一一五一一一一五十一
仲人なしの娵の愛想　環川
一一一一一一一三一
又出たと笑ふ田舎の言葉癖　計涼
一一十十十三七一三五一　梅足」68ウ
二疋か間にどしと菌桶
五一五一一一一一一一　環川
制札の年号古き守護不入　フ
七三七一五一七七三七
狂ふも哀れ附紐の所化　菊貫
一一一一一一一一一　馬隠
なまめきし障子の蔭へ夏の月　雪江
一一一一三一一七一五　フ
貌真赤いに聟の小謡　三遙」69オ
一一一一二一一一一一
汐煮と共に呑込む生ヾ欠ヒ
一一一一一一一一一三
性に合たと江戸にそれなり　霍林
一一一一一一一一三
此頃は寄るもさわるも花の事
一一一五一七一一一一
角くむ芦に角落す鹿
ナ
七五十一十五二十七一十
蝶かろくはね元結に戯れて

五一一一二一五十五五一　七三遥
眼鏡にいとゝ凄い御局
一十五三七五七五七一　七雪江
煤掃けは最ふ正月の来た心
一七一五五一一一五二　七鶴林
大晦日の獅子も草鞋
一七五二三一一三一一　六葵光
中にも此松社よき城かまへ
一一一五一十五三三一三　七仝
奉行の役義情知らでは
一一一一五二十一五一一一　六湖秋」69ウ
髪薙て佐香保は法にミなれ棹
三七二七七七五五二十三七　七仝
蓮を見に来て琵琶も聞く寺
一一一十一一一一一一　フ
放ちやる魚は涼しけ昼の月
一五一一一一七七一一　八「葵光
高良の神そいはん皺尉
七三七一三一一一一五　八「湖秋
御利運の恐悦下戸も酒中仙
十五一五二十一十一七一二　八三遥
兎狩出す極寒の山
一五一十五一三十七七一　八「鶴林
能く寄りてあたり給へと楷拙火焚く
一一七一一一十五一十一　八「雪江」70
清書誉れはしやんと割膝
ナウ
一三五一二一一七五三一　八「梅足
師の坊の眉毛に風のそよくなり
一一一一一一一一一一　八「馬隠
笑れもせすぬけ歯洩る声
五七一一五五一三五七　八「菊貫
しらむ夜を雪じや〳〵と年忘
一一一五一七一一一一　八「計涼
橙入る節買の桝

三一三一一五七七一五　八「環川
人に人遊行の御着野も山も
一一一十一一一一一一　フ
借りた煙管けむり旨かる
一三一一二二一一一二　フ
咲まけじ〳〵と花の色くらへ
ム△△一一一一△一一　フ」70ウ
□□〳〵□の□（トジ目固く点判読不能）
判者甲乙
五十三点　四十二、　六十五点　四十四、
如柳　湖秋子　三遥　一漁　雪江　雀林子
三十九、　三十五、
梅足　梅足
五十点　四十九、　三十五点　三十四、
崑山　霍林子　湖秋子　花谿　三遥　菊貫
三十八、　三十二、
環川　雀林子」71オ
六十一点　四十四、　三十八点　三十六、
得器　湖秋子　雀林子　立志　菊貫　環川
四十一、　三十六、
菊貫　梅足
四十四点　三十六、　四十七、　四十七点
徒柔　環川　菊貫　陸馬順　三遥　雀林子
三十五、　四十六、
梅足　葵光
五十四点　四十八、　四十二点　三十八、
石鯨　湖秋子　馬隠　儿友　菊貫　雀林子
三十四、　三十六、
雪江　馬隠」71ウ
評持
如柳
雀林子　一漁
崑山
花谿

湖秋子　得器　立志　儿友　徒柔　陸馬　石鯨」72オ
環川
菊貫
享和二年壬戌夏五月開巻」72ウ
享和二年壬戌晩冬　菊貫公　環川君
十評物　各十一句言　表月花　折端執筆
歳籠百聲
「雀山子　宝井　立葵
評者「冬央子　陸馬　雲牙
「亀文子　冬映　馬隠
雲和
梅足
環川子御持
「升来子　為大」73オ
升来子夫人　持梅足
「霍媛子　「石鯨」73ウ
（白紙）
上りたる御代のおもわれつ門餝
初聲うらゝ明烏鳴く
裃の粘にも春の香を持て
にこり〳〵にしるき福相
完尓
小山成計り煙艸の吹殻を
盥銅の口の雫折〳〵
失える物のふと出る月清ら
律をしたふる笹の音信」74オ
雀山子　**冬央子**　亀文子　**升来子**　雀媛子　**寶井**
陸馬　**冬英**　為大　**石鯨**」（付箋）
ウ

一七七七三五七五五十五　公
鬼籠る町行抜て紅葉狩
一一五一一二七三七七　環川子
婿取てから仕出す身代
一三一一五一一五三一　馬隠
いつと無く多勢に無勢國言葉
一一一一一一一一一一　雲和
茶宇の袴も折目正しき
一一一三一七七一一七　雲牙
呼入の時に夜込の雪を見て
十五一一一三一一五一五　立葵
寒そうもなき紅梅の艶
一十一一三一一三三一　梅足」74ウ
碁敵か帰れは跡へ貸本屋
一一一一一一十五三七一　公
誰か見る目にも別荘の妻
五　一　三
幽篁に夜を待つ月の妬氣也
七一一五一五七七七七　馬隠
座禅の屈を菊て養生
三七三一一一一五一三　川子
蜻蛉の飛んてハ戻る溜り水
一十五七一五十七一七十八　梅足
旅とは見へす業平の旅
何
誰人のおましか花の門構
（点ナシ）
摘ぬあたりの若菜董たつ
二　」75オ
一ム一三一二一一一一　雲和
春の山鳶も残りて爰かしこ
一七一一五三十一五十三　雲牙
孝と舞とに亀菊か沙汰
一三一五一一七一一一　立葵
錠口ハ華文箱のふたつまて
三一一一一一一七一一
抜参する帳を指出す
一十三一一二一一七五　公
畔道を通る寸馬の東坡居士
一五一一一七一五一一　川子
人ころし成箅へ日の雪
一一一一一一一一一一　梅足」75ウ
買て来て二度悔したる鉄行燈
三一一一一一一一一一　雲和
八声告ても酒は酣
一一一一五五七三一一　馬隠
賑な隣うらやむ嵯峨の奥
二十五　立葵
一一五七一七十五七五　公
悟たよふて愚に返る尼
一一一五一五五一三　立葵
米炊く溝の流れに燕子花
（点ナシ）
涼敷覗く引窓の月
二十　公
七一十五十七七七十五七十
結納を並べて娵を突出し
五
舌の吹出に貰ふ堅紅粉」76オ
二ウ
五一五三一十七五七五　雲牙
ゆふ〳〵と師走の海の懸舟
一七一一一一五一一一　梅足
鯨の吹た息に浮く城
十一一一一七一七七一　川子
五斗俵を張子の様に男とも
一三十十一一一一七一　馬隠
番頭捌き下戸に仕裸ふセ
一十一一五五七一五七　立葵
牡丹畑十九や廿の真盛
一二一一七七五十五一十
僧も奇麗とほむる薄雲
一一一一一一一一一一　雲牙
呪の不思議虫歯の虫吐て
一一十十三十三一一十五十十五三　梅足
相撲見た夜はぐつすりと寐る
（点ナシ）
うそ寒き月の夕部の風の音
一一一一一一三十一　公
足し歩兵に遣ふ栗の渋皮
一一一一三一十一七　川子
對陣の横を牛押し杭引
一二一一一一一一七一　雲牙
恐ぬ夜はやきつい乱れ鶏
包ても香やへかくるゝ
引るゝも引も香ふや花の袖
（点ナシ）
蒲公英伸る透垣の間
三　」77オ
七一一一一七七一七七　馬隠
中り呼ふ霞の奥に屋鋪町
三十三一一一一七十一　立葵
髭の白髪のうつる盃
二十五
七十三五一十三五七十　仝
太々に二度迄来たと功者ふり
一二一一一一一一一一　梅足
壁の狂歌の見知有る筆
一一一一一一一五一　公
泣口へ亦挟るゝ初松魚
二十
三十八七一十五十五七五一一　雲牙
禿か首の嶋にからまる
一一一一一十一五七十五二　川子」77ウ
霊と名の立て瘧の恥かしき

一一一一一一一一一一五一　抹香嗅い寺の請取　六馬隠
十一一一一七三十五五一七　桜見に寄一群もさくらにて　六雲和
三一一七十一三一十一　大生酔の足に陽炎　七公
二十五
一三七一三三七五十五三　年礼か残らす済て実に春　七雲牙
一一一一一一一一七一　湯屋て誼譁の将棋初まる　八立葵
（点ナシ）
ふら〳〵と煙管くらへて暮の月
（点ナシ）
おとけつるみに秋の賑　」78オ
三ウ
五七一十五十七十十三五五　傾城の柳散にハ氣も付かす　九立葵
一二一七一一一一一一　客間に合ぬうわの空炷　七雲和
一一一一一一一一七一　仮名傳受雨の日すから垂込て　七梅足
一一一一一一一一一一　終ひ鼻の先能馴れし鴨　七川子
一一一一一一一七七七　蒟蒻を行徳彼岸に置忘れ　七馬隠
一一一一一五一五一一　剃る髪をたに持ぬ疥癩（ヤックヒ）　八雲牙
一十一一一五五五五五　跂はね馬にどつと市場の人なたれ　八公」78ウ
一一一一一一一一一一一　取揚婆らの通る懸声　八梅足
一一一三七一一五七一　さなきたにおもきか上の宮仕ひ　八雲和
一十五五五五一一五七一　酔たと見へて帯の空解　九立葵
一一一一一三七五七七　鶴の羽の浮し伽藍の手洗鉢　八川子
七一十一一一七五七三　玉眼すこき開山の像　八馬隠
（点ナシ）
ふり向す月うつむけは花の雪
（点ナシ）
糸遊高し塀の嬬板　」79オ
ナ　二十五
一十一一一五五十十五　乗初の馬場勇ましく睾丸鳴りて　九梅足
一一一一一七一七一　優　どらも諸藝も増る御次男　九公
五十
一五五一三十五七一五十　よし原も三千坊の一構　九雲牙
五七三一一一一七十五一　冨貴を分て貰ふ嗄井戸　九川子
一一一五十三一一一五　夏来んと言し計に青簾
二十
一三一一一一一七十一　文鰭魚　いやそふに喰ふ乳母の飛魚　九馬隠
三一一一一一一一一一　我侭をいわせて翌も神参　十一「立葵」79ウ
一一一一一一一一七一　鍬を入ると崇る旧跡　十雲和
一五一一一一五十五七一　日土圭に一寸と遠馬の鞭立て　十公
一七一一一一一一五一　勅使の御宿塩迄もふる　十雲牙
一一一一一一一一五七一　南氣に有平糖の躰たらく　十川子
二十五
五七七十八十八五十五七五　夫婦別有り箱入の雛　十馬隠
（点ナシ）
打寄て文讀ている朧月
一一七一一一十八三三　あまり利たもひよんな治聾酒　十梅足」80オ
ナウ
一七七七七五七七七七　不沙汰した言分になを連て来て　十一「川子
二十
一三七七七十三七七五　冨士から先へ見せる新宅　十一「公
一一一一一一一一七一　剃髪の物好替る頭陀袋　十一「馬隠
一一十五一一七一三三五　牛に乗ては暑い夏の日　十一「雲牙
一ム一一一一一一五一　閑古鳥心筑紫も筆の艶　十一「雲和
一ム七一一一一一一一　物に　からりの独旅する　十一「梅足
三　二　五
色と香をかたみに花の品定
五十九点　三十三点　六十三点　口口
賑わふ門の（トジ目固く判読不能）　」80ウ
崔山子　立葵　馬隠　升来子　御　立葵
二十六、　四十一、
環川子　馬隠
百十三、　五十四、　六十二、　三十九、
冬央子　雲牙　立葵　崔媛子　御　雲和
四十九、　三十九、
梅足　雲牙

亀文子　雲牙　御　五十八、四十八、
　馬隠　三十五、」81オ

宝井　雲牙　立葵　七十六、三十五、
　為大　御　馬隠　八十七、六十八、
　環川子　三十九、
　立葵　五十四、

陸馬　御　雲牙　五十五、五十四、
　石鯨　雲牙　馬隠　六十三、五十五、
　梅足　四十五、
　御　四十八、

冬英　御　馬隠　六十九、五十六、
　環川子　五十六、」81ウ

渋谷持　七評
　子鷹　李岱　百珉
　雙鳧　朱明　東禹
　春色

百聲　六句言

南部坂持　七評　環川持
　兌堂　崑山　紀逸　百化
　為大　陸馬　佛外
　冨屋　」82オ
　白かりし
　秋を欺く
　紅葉哉　菊貫　」82ウ

律や調ふる鹿の引聲
文机によれはいつしか月更て
　塵壷の塵の積るともなく
勝手口僕か願に明直し
　汲くらぶれは水も様〳〵
草鞋の跡しつかりと霜柱
　冬へ残て飛ぬ蜻蛉　」83オ

朱明　東寓　子鷹　李岱　春色　百珉　双鳧　兌堂
崑山　為大　陸馬　佛外　冨屋　紀逸　百化」（付箋）

一一七五五七五五七五十七五五七
藪ひとへ越ても近い機の音　芦風
五五七二七五五三一三七三九一十
　茶て茶てもなし別荘の客　梅足
七十十二一二二一五一五一二一一一
飼猿の年かよる程持餘し　立葵
三一一七一一一十七一五一一五一
　似合ぬ眉を夢助ている　環川
五五一二一一一五一一一一十三五
屋根舟の三絃箱に座か崩れ　菊貫
十三　二一七一一十二五七七一五一一五
　今立川鷺のむつかしい首　春珉
五一七一十七一三一五十一一一三
雪に其力を見せし豊後竹　如圭」83ウ
十十五一十五一一五一七一三十五一七七
　中庭遠く判取の声　湖遊
一一一一一一一一一一一一一一一
涼しさハ月形の窓ふき抜て　フ
一七一一五十五一五七五一一一一
　世を捨人か浮むせの一　杵十
一三一一三一十一一七五七五一
印寵に已生ル金か鳴て居る　子弦
二十
二十十五十五一二三七五七七十五七五
　見せ馬の歯をいぢる親指　欺雪
一一一一一一一一一一一一一一一
風請る羽織に掛る花の枝　フ
五一一一一一一一七一一一一一一
　軒へさわつて大凧の足　フ」84オ

二　二十　二十
一七二十七七五七五五三七五七十十五
涅槃會の留守頼まれて肘枕　梨東
三二五三二一一七一十一七八十七
　水も豆腐もかわる洛外　芦風
七五一五一五三五七七五七一十三十
とふ見ても産たと見へぬ女房ニて　環川
一一一七一三一一一五一五一五一
　手利のくせに針嫌ひなり　梅足
一一一三一一一五一一七十七十八
小燈の木末を渡る離れ家　立葵
五三一二一一一五七七五十五五一
　裸て名乗る温泉場の近付　梨東
十五一一一二五三十三一七一五一一七
世渡りも安く生海鼠の鰭もなし　如圭二」84ウ
一二一五十五五一五十一一五一一
　機嫌の内に返す生酔　春眠二
一五五二十三七一三五三十七七五七
夕日指す日吉祭の引残り　湖遊二
五五一一一一五十十五一一一一一三
　又かくいれるおぶい子のだゝ　環川
一一一一一一一七三一一一一一一
半分は笑ひに戻る風車　芦風
一三一一一二一一一一一二一一五
　柚子は匂へととぶろくの寺　立葵
一一一三五一一一一一一一十五一
閲伽桶に見ぬ月影のいと澄て　フ
一一一一一一一一一一一一一一一
　西と東を鳴分る虫　フ」85オ
二ウ
十三十一七一三七七十七一一八二五
連のきれ二人かふたり鼻緒摺れ　菊貫
一五一一七十一一七七一一一七三
　美女名残なりたゝてない腹　杵十

一七七五一一一一一七二三一一一
光陰の矢落込合年の市　梨東
五十八一二一五七七五一一五七一一
蕎麦屋のやくみ大打箱めく　春眠三
一一一十三五一一一一十五一五一一
物狂ひ誰が教へて笹の段　斯雪二
三一一二五七一一一一一一一一
霧の籬の中に木樨　如圭三
一一一一一一一一一一一一一一一
遠くには犬の声して暮の月　フ」85ウ
一七五十一五五七五一五五五一五
肌寒く寐る保土ヶ谷の宿　子絃二
七十二一十八五五五十三十五七一十一一七
藁灰に焼餅しつむ杵の音　春眠四
一五一二一一一一一十二七一一
下錠口に遊ふ部屋方　斯雪三
一一一一一一一七五一一五一一一
惜けなく裁て投出す甚三紅絹　湖遊四
五
一一七一一一一一一一一一一一
さらりと分る物の言取　フ
一一一一一一一一一一一一一一
花は又夕に栄へて川の際　フ
一一一一一五二一五一一一一一一
春雨晴て大石の艶　フ」86オ
三
五五一二十十五五十五十七七五一一
萬歳の御札を娵か馬鹿にして　立葵
一二一一五五一十五一七一七七三一
聾煙管の靨入らせる　環川
十五
十七五七五一五一一十五一五七一十
荷ハはねて放た小荷駄紐たらけ　春眠五
七七七二一一七五七七五七五十一
名所を木履て廻る川留　如圭四

一三一一一五一三五五一十一一一
権兵衛ハ餅七兵衛は酒とそげ　子弦三
七一一五一一一五一三一二一一一
打懸た碁にさめる居風呂　斯雪四
五五一十十五三五三七七七二八五三
かふ持て行と教て遣る牡丹　湖遊四」86ウ
七五一一一七一七一一一五一一
日に買物のたへぬ耳たぶ　フ
一一五一一五一壱一一五一一一五
其癖に年々籠も建たして　杵十
一二十五二二一二一五五五五一三一
駿河泊の不二を見る夢　芦風
一七一一一一一一一一一一七一一
阿蘭陀に打てかわつた雛の旅　菊貫四
五一七七十五五一一七一五一一五一
きのふの桜駕龍にしをれる　斯雪五
一一一一一一一一一三一一一一一
朝の月蛙か鳴てかしましき　フ
㊀㊁㊂㊃㊄㊅㊆㊇㊈㊉㊊㊋
㊌稲荷計か出かわらすすむ　子弦四」87オ
三ウ
五三一五十五一一七三一一七七一
請られて橋の名多く覚兼　立葵
三七一五五三一七五七一五一七一
諠譁を割て通る難波女　芦風
二一一五五一五一一一一五三七
夜芝居の蝋にはもろき雪降て　如圭五
一五一一一七一五一十五一一二一一
爰そ百薬ぐひと小半分　環川五
五一一一五二一一十一一一一五七
不受不施の畑ハ隣も手を附す　「立葵六
一二七五十一一五五七一一七七三
孝子の門に立とまる任　梨東
五五一一一五三一一一七七九三五
傘取に遣れハ降止む俄雨　「芦風六」87ウ

七五一一一十八一三一七一五一一一
四五膳喰て新の蕎麦の時宜　梅足
一一一一一一一五一一一一一一一
まだ青き手織の筵月栄へて　フ
十五五七一一一一十一五五十五一
母は恥しそうな関取　杵十四
七七一五七七五五五七十五五五一一
斎僧を送る木曽路の盲馬　梅足四
一一一一一一一一一一一一一五五
留屋淋しき昼の行燈　梨東五
一一一一一一一一一一一一一一一
南からそろ〳〵花の笑ひ顔　フ
一一一一一一一一一一一一一一一
障子明れハ庭の陽炎　フ」88オ
ナ　二十
五一七七二十一一七一五五九七七
鶯も春を撰ミに京へ出て　「如圭六
十五一七七一一十十八五一五十八八十十五
縫の下繪を頼るゝ聟　「欺雪六
三五一五一七三五一七一七五一一
立聞の片方つゝは休む足　子弦五
十八一一一五三七一五一一十三一一一
桶の溢れにかむり振百合　「春眠六
一一一一七十三一五一七三五五二五
尼寺の垣根計リは男結ひ　湖遊五
一十三五二十八一一五一七七七一五一
鼻から下の見えぬ笙吹キ　「子弦六
七十一一七一一一一十一五七五七
川廣し船も廻れハ輪を乗て　「湖遊六」88オ
五五一五二十十一五一一七一十一一
牽頭か即坐猟の庖丁　菊貫四
五三一一一五三一七一三二一一一
牛嶋にたら〳〵秋の女中群れ　杵十五
一一一一一一一一一一一一一一一
月と見る迄庵の丸窓　フ

一一十七五五十五三五七五一一五七
留守問ふた證拠芭蕉に狂歌して　梅足五
二十　二十
一一一十一一一十一五一一七七
貧にせまれと主ハ重ねじ　「環川六」

三七七三一三二五一一一五一一
今入の梵論手のあれる計也　「梨東六」
一一一二一一一一一三一三一
橋を越れは違ふ家並　フ　」89オ
ナウ
七十五七三十十五十七五十八一五八五一
船頭も合点雪見の出来心　菊貫五
五五一三五二一一七一十五十七一
妻にまかせて内は濟茶屋　「杵十六」
一一一一五七一一一七一一一一
恋知りを相手にうかと酒の数　「梅足六」
一一一一一二一五一一五一五一十
火入にぽちり星のよふな火　フ
一一一一一一一三七一一一一一
子に一夜鼠に一夜黒羽　「菊貫六」

一一七五一一一七一一五五一一五
旅寐の夢もおかし新宅　フ
一二一三一五一一一一一一二一
花深き窓に艶なる調もの　フ」89ウ
一ム一一ムムムムムムムムムムムム
立舞蝶もねたき羽のあや

青山持
朱明判　春眠　斯雪　如圭
東宇、　菊貫　春眠　湖遊
子鷹、　梨東　芦風　如圭
李岱、　斯雪　湖遊　春眠
春色、　菊貫　湖遊　立葵　」90オ
百珉、　梅足　如圭　杵十
双鳧、　春眠　梅足　湖遊
南部坂持
兌堂判　環川　斯雪　子弦
嵐山、　梨東　春眠　立葵　」90ウ
為大、　環川　春眠　梅足
陸馬、　斯雪　如圭　梅足
佛外、　子弦　春眠　湖遊

冨屋、　菊貫　春眠　湖遊
紀逸、　環川　杵十　芦風
環川持
百花、　立葵　湖遊　如圭　」91オ
青山
享和三亥十月七日開巻
南部坂
同　十月十日開巻
菊貫　三巻　子弦一巻
環川　三、　立葵一、
斯雪　二、
梨東　二、
春眠　二、
梅足　一、　」91ウ
（白紙）」裏見返し

付記

○発句・付句の右に付したのは宗匠（点者）がつけた点数である。この巻も『菊畠』の多くに見られるように、表八句が終わった各巻の冒頭（第九句目の右横に付箋をつけて、立て並びに宗匠名を列挙している。点数は、その宗匠（点者）順である。

○連句中の署名「御」「公」とのみ記すのは、「御殿様」「菊貫公」で菊貫（幸弘）のこと、「環川子」を「川子」と略記する場合もある。また「フ」は、「執筆」の略、なお、詠句者の署名がないものは、執筆が詠んだ句と見られる。

○漢字の表記は、同じ巻の同一人でも異なる表記（「鶴林」「雀林」など）がなされるケースがあるが、原本のままとした。

○連句中の署名に十二「馬隠　のようなケースが見られる。これは馬隠が詠んだ句の十一句目を意味している。他も同様である。

○記号らしき「ム」や「△」については未詳。